

# あうるの杜

中館寛隆編集事務所  
中館寛隆さん

Interview

評論と編集で北海道内の出版物をもり立ててきた、中館寛隆さんの「あうるの杜」です。

## 『読書北海道』

一九七七年に仲間二人と北海道読書新聞社を立ちあげ、書評紙『読書北海道』を発行し、その編集長を務めました。その後、二人は退社。第一三号から私個人が編集発行する月刊紙になりました。

発行の目的は、北海道に関する出版物の批評と情報提供、表現活動における批評の活性化でした。書評だけにとらわれることなく、色々な分野の表現や研究活動、あるいはメディアそのものも批評の対象にしました。

文学批評が紙面の柱のひとつでしたが、詩の笠井嗣夫と永井浩の論争など、論争をいくつかが生み、道内の文学活動に大きな刺激を与えてきたと自負しています。結局、『読書北海道』は一八九九年、一三二一号で休刊し、その後はメールマガジンとして発行した時期もあります。

## 時代背景

『読書北海道』が出た時代は、ちょうど北海道百年の頃で、「新北海道史」の編纂があり、道史研究がぐっと進みました。それによって地方史研究も活性化し、市町村史ブームが起り、歴史やアイヌ民族関係など道内の出版が活発になった。

文学の方でも高橋揆一郎が芥

川賞を受賞しましたが、その高橋や渡辺淳一がいた「くりま」という札幌の文芸同人誌がありました。渡辺淳一はすでに直木賞を手にしていましたが、「くりま」の書き手などが毎回のようになり芥川賞・直木賞の候補になり、盛り上がった時期でした。

## 考え方に変化が

『読書北海道』をやめた後、北海道新聞から、読書欄に北海道関係の本の記事を定期的に載せたという話があり、その枠のコーナーネットを去年の三月まで続けていました。二〇〇三年には、掲載されたものをまとめ、『必読北海道』という単行本も出版しま

した。

『読書北海道』をやっていた時は批判第一でした。いい仕事をしただけからこそその批判なんだけれども、書き手にも自負があるから、反発につながってしまった。しかし、道新の仕事をするようになってからは、なぜこの本を取り上げたのか、その価値を説かなければ意味が無い。だから『読書北海道』時代のように、批判するために取り上げるのはちょっと違うのかな、というふうに考え方が変わりました。

## 北海道の作家

今、北海道の作家は期待がもてますよ。『読書北海道』の時代よりもっとあります。昨年『肉弾』で大藪春彦賞を受賞した別海の河崎秋子など若手が次々とデビューしています。

岩見沢出身の水室冴子の功績を讃えて「水室冴子青春文学賞」が二〇一八年に創設されたけれど、いま文学賞がものすごい勢いで増えています。賞の本身も純文学だけでなく「氷室冴子賞」のようにインタテインメントも多い。多くの作家はそこからデビューしている。

## これから

今後、北海道の出版業界は厳し

いんじゃないですか。道内出版社の数は雑誌社を除くと約一〇社でほとんどが札幌。一昨年北海道命名一五〇年だったのでちょっと出版点数が増えたけれど、去年また戻ってしまった。去年は総計一五〇冊も出版していないと思います。

私が『読書北海道』をやっていた時代、道内の版元さんの一番のネックは流通でした。東日販が全部おさえていたから、取次に口座を持たないと本がさばけない時代がずうっとあった。しかし今は、ネットで買えばいいという時代になり、その問題はクリアできました。

けれども、ネットで本を買う人は、すでに買う本を決めている人じゃないですか。書店に来る人は、この本を読みたいので買いに来たという人だけではないはず。町の本屋さんには本への入口として大切な役割がありました。それが急速に消えているのは残念なことです。

もう七〇歳になるので難しいかもしれないけれど、北海道の出版界をキチッとまとめたものを残したいですね。戦後の北海道の出版社ブームなど掘り起こし記録に残したいテーマは、いっぱいあるのです。

# 道内出版界を まとめたものを 残したい



中館寛隆

なかだてひろふか

1950年釧路市生まれ。札幌市在住。1977年北海道読書新聞社を設立。『読書北海道』の編集長を務める。1989年131号で休刊後はメール版を発行。1996年から2019年まで北海道新聞の北海道の本のコーナーを担当。北海道文学館評議員。編著に『読書北海道(縮刷版)』(1995年、北海道読書新聞社)、『必読北海道』(2003年、同)などがある。